
黒蝶の後継

灯籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒蝶の後継

【Zコード】

Z4531C

【作者名】

灯籠

【あらすじ】

垂氷家に生まれたが故に黒蝶という、悲しい役目を生まれながらに背負っている半神半人の娘の物語。

登場人物および説明（前書き）

少々、グロい描写があるかも知れないので、そういうのが苦手な方は読むのを控えてください。

登場人物および説明

(登場人物および解説)

神王

神々を統べる者。唯一魔王に逆らうこと�이나타난다.

神無月

かんなつき

魔王の役職名。

黒蝶暗殺事件により、魔王が信頼の置ける者が務めるようになった。

魔王

魔族を統べる者。唯一魔王に逆らうことが出来る。

魔界

魔王補佐の役職名。

黒蝶

別名、月翳りの兎手とも言われる。

垂氷家の黒か黒に近しい色の蝶をその身に宿すもの。

生糸の兎手。

たるひけ

垂氷家

上流貴族の一つ。

古来より蝶を宿した女が当主を務める。

黒南風家

上流貴族の一つ。代々魔王を務めてきた家系。

古来より男兎は龍を宿すように龍にちなんだ字が名に使われる。

甘露家

縁盟界の王族の総姓

氷楼家

下流貴族の一つ。命知らずにも、神王位と魔王位を狙い兎手を送り込むが返り討ちに会い滅亡する。

縁盟界

21代目魔王夫妻と神王夫妻が建てた界

えんめいかいおう
縁盟界界王

甘露家の者から選ばれる。

修行

王族や上流貴族の子が人界に下されること。

雨龍は皆殺しにし兼ねないため命の山になつた。

仙界

普通の人間は入ることが出来ない場所。

半人

半神半人と半人半魔の略称。

甜済茶

とても甘い茶。人間には苦い。

憂蝶

甕兔榎の別名。最高占い師の名

甘露緋椿

前神王。銘蒐の夫。壊龍とは、喧嘩するほど仲がいいという仲。

黒南風壊龍

前魔王。儻の夫。緋椿とは、喧嘩するほど仲がいいという仲。

霧雨秋姫

甘露家三女で現魔王。不本意だが雨龍の妻。神王だが幼少時代から少女時代まで魔法が得意であつた。得意なのは水属性の魔法と神法全般。

黒南風雨龍

黒南風家長男で現魔王。秋姫の夫。青年期は鬼畜王で有名だつた。

黒南風桜

黒南風家長女だが魔法が使えなかつたので兄弟に迷惑がかかるからと家出をした。が命の山での雨龍との約束を果たすため縁盟界へ戻つてきた。

甘露銘蒐

前縁盟界王。緋椿の妻。前甘露家当主。女性なのに男勝りで浮氣者。

黒南風夢

前界王補佐。壊龍の妻。前黒南風家当主。女性らしく優しいが怒ると怖い。

白露桔梗・・・研究熱心で妹思いだが、短気なところがある。幼名：

甘露桔梗

椿小春・・・天然でキラキラ好きで人を苛めるのが大好き。たまに桔梗に無視される。

幼名：甘露小春

霧雨秋姫・・・幼名：甘露秋姫

時雨氷華・・・現界王。刀の名手。流されて樋の妻。得意なのは氷

属性の魔法と炎属性の神法。秋姫が大好きで、ちょっとシスコン。

幼名：甘露氷華

現界王補佐・・・黒南風樋 黒南風家次男。氷華の夫。得意なのは炎属性の神法と氷属性の魔法。キレると、手がつけられない。五ノ姫・・・白南風甕兔榎 人界での名は霞蒐束。現東ノ国国王。得意とするのは先見と占い。修行中の国では豪蝶といつ名が与えられていた。

月汎海市・・・正体不明。甕兔榎の夫。甕兔榎をとても慕っている反面、守らなくてはと思っている。

1代目黒蝶・・・垂氷慧莠廩 愛称は薇莠。^{みゅ}弟子が秋姫以外に5人

いて皆仙界守護者にした。今は亡き炯香の母。

2代目黒蝶・・・垂氷炯香 薇莠の長女。

朱兎界（隠居した神王夫婦と魔王夫婦のための界）

穎弥が国王を務める国。

西ノ国

炯香が治めていた亡国。

南ノ国

紗代が国王を務める国。

命の山

一年中桜が咲いていて枯れることの無い山。

遙雲（女仙）が守っている。

仙界にいるだけで別に仙人ではないが山の守護者である。

秋姫より、3才年上だが、弟子としては、同期。命の山の守護者。

遙雲

はるな

元捨て子。

まぼう

魔法・魔術

まほう

魔族が得意とする術

しんぱう

神法・法術

しんぽう

神族が得意とする術

ほうじゅつ

琴李・・・人界の少女。幼い頃母を亡くし、放浪していたところを

ことり

紗代に拾われる。

さよ

その際神に祈つても聞き入れてくれなかつたため神を信じていない。
笛・・・天才だが少々抜けていて、天然な少年。趣味で色々やつて

いたらしく王族のたしなみは殆ど完璧に出来るらしい。

紗代

さよ

・・・南の国の女王。とても気弱で寂しがりや。

燐霧

しょうりん

・・・実は雨龍を知っているその理由は本編を・・・。

（秋姫の臣下）

黒華・・・秋姫の臣下の中ではまとめ役。しつかり者が敵や、弱

こくか

いものいじめをする奴らには容赦ない。短気ですぐ怒りなかなか冷

めない。

遠雷・・・風華の兄。秋姫曰く氣難しいグループのギリギリライン。

えんらい

自分が認めていない奴と妹を泣かせる奴とは、口も聞かない。

しゃなん

舞焚・・・優しいが、冷酷で言葉遣いも普段は良くないが割り切つ

てている。

自分の認めた炯香から離れる気は無いようす。

かぎはな

風華・・・遠雷の妹。穏やかな性格で心優しい少女。

せつらん

雪嵐・・・気難しい性格でよく話をばぐらかす。炯香と舞焚が大好きで言うことをきく。自分より幼い少女は小娘と呼ぶ。しかし、炯

香は別。

黒華の妹すごい人見知り。

白華
春嵐
木綿

雪嵐の妹。すごいシスコンですぐ泣く。

最悪なくらい気難しい。雨龍の分身のような奴。

登場人物および説明（後書き）

まだ、設定のみなので、これから更新していきます。
次は本文に入る予定なので、よろしかつたら読んでいただけないと光
栄です。

灯籠

第一章・言語改正（其の一）（前書き）

この章はそれほどではありませんが、口に描写されるものがある
かもしれない。苦手な方は読むのをお控えください。

第一章・言語改正（其の一）

「これは、異国のもの同士が殺しあうよつた悲しみの絶えない・・・争いの絶えない世界。

「危ない！後ろ！！」

「えつ？」

カンツ

「よそ見してると死ぬぞ！！」

「そんなへまはしねえよ！！！失礼だな！」

「二人とも喧嘩してる暇あつたら1匹でも多くの敵を倒しなよ！！！」

「！」

「分かつたよ琴李。」

「ほら来た。」

「私に任せろ！」

「我が剣に宿りし炎の力よ我の行く手を阻むものを倒したまえ！」

ボツ

四方にいた敵が焼け死んでいく・・・

「これで最後？」

「ああ。」

「あー嫌な景色、見渡す限り、人の死体つて・・・」

「仕方ない、私達はこの人間達を始末しなきやいけなかつたんだ。」

「俺も同感だ・・・。」

「僕も・・・。」

「神様つて残酷だよね、箇。」

「神なんて信じてるのか？琴李。」

「まさか・・・。」

「神を信じて、神に忠誠を誓う人間共を憐れんでいるんだよな？琴

李。」

「まあ・・・ね。畠香。」

「皆わんもつ城へ帰りましょ。」

「つんー。」

「ああ。」

「こんなトコ一分でも早く居たくない……。」

（南楼城）

「ただいま戻りました……陛下。」

「（）苦勞様……陛下はやめて、もう（）の城には私達しか居ないのだから……。」

「では、お言葉に甘えて……紗代さん。」

「紗代でいい、紗代で……。」

「紗代……。」

「うん。やうやく……。」

「他のものは?」

「紗代……。」

「紗代……さん。」

「紗代……。」

「紗代でいい、紗代で……。」

「うん!それでいいわ、後は敬語もやめて頂戴……やうやく次の戦いからは私も戦陣に赴く事にしたわ、だからこれから宜しく。」

「……えつ?」

「あの……紗代わん……その口調ではすぐに貴女が王である事がばれてしまいます。」

「そうよ……紗代!炯番くらい性格悪かつな口調じやなこと……。」

「ちょっと琴李それどうこいつ?」

「そのままの意味だよね燐霖?。」

「ああ……。」

第一章・言語改正（其の一）（後書き）

誤字、脱字が多いかもしれません、お許しください。

灯籠

第一章・言語改正（其の一）

「僕も炯香さんなら男装すれば女とは絶対ばれない……と思います。」

「箇まで……ひどいじゃないか……。」

「ほりつその口調がいけないんだって……。」

「うつ……。」

「あのあ……眞さん私にあの口調で話せとやうこいつですか？。」

「うん……。」

「自つ自信がありませんつつ……。」

「まあ元、姫じやあ仕方ないが……劍は使えるか？。」

「少々なら……。」

「人は斬つた事あるのか？」

「いえ……ないです。」

「なら、やはり口調は直すべきだと思うが。」

「しかし、そうしたら……誰が紗代のフリをするの？」

「劍で一番強い奴だな……。」

「性格悪……うつ……。」

「やはりここは、そこでブツブツ一人悲しみにふけっている炯香……。」

「はつぱい？」

「お前、その口調なんとかしろ……。」

「え？……うん……がんばる……で、どうこう口調にすればいいんだ？」

？」

「丁寧な口調だよ！炯香！」

「無理だ！そういうのはお前がやればいいじゃないか！琴季。」

「琴季さんは剣術強くないからだめなんです……頑張つてください炯香さん……。」

「つだ一わかつたよ。やればいいんだろやれば……。」

「そういうこと。」

「よろしくね！ 炯香。」

「ああ、わかつたよつ・・・じゃなかつた。分かりました・・・。」

「あーあ先が思いやられる・・・。」

「それを言わないで下さー・・・。」

「で？ これからどうするんだ？ 紗代。」

「出来れば、東の国に渡つて国王に会いたいのですが・・・。国境には暁ノ国の追つ手がいるから・・・貴方たちは無事にたどり着けるでしょうけど・・・私はきつと無理・・・ね。」

「何のための囮だと思つているの？ 紗代。」

「えつ囮？ なんですかそれは・・・琴李。」

「わーひどいですわ、なんのために私が言語改正じりつて言われているのか分からないとおっしゃるのですね・・・。」

「おつ炯香！ なかなかやるじやないか！」

「当然です！ 私にかかるば言語改正なんて朝飯前ですわ！」

「紗代は朝飯前なんて下品な言葉いわないと思つよーねえ箇？」

「やうですね・・・おやうくは朝「はん前」と言つんじやないでしょうか。」

「つてそつこいつ違いかよーーー！」

「なんかおかしいこと言つました？ 僕。」

「お前頭脳明晰、武道もそこそこなの」「・・・なんでもうこいつとは天然なんだ？」

「箇、私は朝「はん前とも言わなこぞー」

「おつ紗代もなかなかやるなー！」

「・・・・・・。」

「じやあなんて言つんですか？ お朝「はん前？ それともお朝

お「い」飯前？」

「だーかーいそつこいつ意味、じやなこつてー。」

「へ？」

「紗代はそんな言葉はいわないと（あつがとつぱれこまか）つて言つていつたのーーー！」

「何で怒ってるんですか? 今季?」

「もーいいよ!」

「へ? . . .」「

第一章・言語改正（其の一）（後書き）

文才なくて本当にすいません。

読んでいただけて光栄です。

なるべく、早く更新しようとおもっています。

灯籠

第一章・炯香の正体（其の一）

「紗代！分かつたら早く東ノ国に文をだして国境で待ち構えている奴らを騙せ！」
「うつうん！」
「あつ紗代！紗代の得意なことを炯香に伝えてー。」
「？・・・分かりました！」
「えー他にもやんなきやいけないの？」
「炯香つ言語ー。」
「は、はいいつ。」
「私の得意な事はですね。お琴、お華、お茶、それから・・・箏、琵琶、位でしょうか・・・」
「すゞいっ！すゞいっ！さすが紗代つ。」
「僕も琴は出来ないな。」
「えー他全部出来るの？」
「その位は贈んでいます。」
「じゃあ今度教えてー。」
「いいですよ。」
「やつたー」
「だ、そしだがどうするつもつだ？炯香。」
「逆に苦手なものは？」
「弓だけです。」
「それなら何とかなりますわ。」
「えつ？炯香、琴、華、お茶、箏、琵琶全部出来るの？」
「ええ、嗜む程度には、もちろん弓もできますよ。」
「え？嘘でしょ？」
「琴李、箏、お前たちこいつが・・・何者なのか知らないのか？」
「いこつは・・・」
「言ひなー子供に教えてやる必要はないー。」

「子供つて！ひどいですっ。」

「そうよ、私達だけ仲間はずれなんて！」

「あのーすいません私も知りませんが・・・。」

「国王陛下には言つておくべきなのではないか？」

「・・・。」

「お言いなさいー！」これから仲間として一緒にすこすのですよー。」

「わかった言いましょう・・・しかしそれを聞いたからといって態度が変わつたら承知しませんよー！」

「分かつています。」

第一章・炯香の正体（其の一）

「私は、今は滅びた西の国の王なのです。」

「え？ 王様？」

「あの、この国の王族の遠い親戚の？」

「つてことは通り名は紗羅様？」

「だから態度を変えないで下さいませ、それとその名で呼ばないで下さい。」

「じゃあ今までどおり、炯香、と呼ばせていただきます」

「数々のご無礼謝罪いたします。」

「いまは王といつても何の価値もない人間よ。」

「ですが・・・」

「それと貴女は国王なのですよ、ペコペコ人に頭を下げてはなりません。」

「民の居ない王が何の価値があるのですか！――！」

「私達は貴女の民ですよ。それに、どうやら貴女は民が全て死んでしまったと思つてているようですが、ほとんどの民は私が非難させましたから。」

「さすが炯香ー。」

「では、明朝出発致しましょう。」

「そうですね。」

「じゃあ僕はもう遅いので寝ます。」

「おやすみなさい箇、琴李ももう寝たら？」「

「俺も自室に戻るとしよう・・・・。」

「燐霖がいないならねるぅ・・・」（つまんないし）

一人はそれぞれの室に戻つていった

「・・・・。」

「・・・・。」

「紗羅様・・・・。」

「『めんなさい、騙してたようなことになつてしまつて……。』

「いいえ、貴女がご無事だつたという事で十分ですよ……。」

「それに謝らなければならぬのは私のほうです貴女の国が滅びか
かっているときに……何もして差し上げられなかつた……。」

「そんなに気にすることはないです……我が國の、いえ、私の力
不足だつたのですから」

「そういうつていただけると少しは気が楽です……ありがとうございます。」

「貴女とかかわつてしまつた以上、私は全力で貴女を護衛します……
。」

「そんな……恐れ多い……です。」

「この国、いえ、この世界を救つてくれそうな貴女を死なせるわけ
にはいきません。」

「やはり貴女は薇薙様に似ていらつしゃる……氣高い魂の持ち主
でいらっしゃるのでですね……。」

「・・・・・・・。」

「出過ぎたまねをいたしました……申し訳ございません……。」

「いいえ……それより今日はもう遅いですし私は先に失礼します……
。・。」

「おやすみなさい。」

「ええ、また明日……。」

「そうこうと畠香は室に戻つていつた……。」

第一章・炮香の正体（其の一）（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
よろしければ、感想などいただけるとともに嬉しいです。

灯籠

第一章・炯香の正体（其の一）

「炯香の率へ

（本当にアレで紗枝殿の娘か？？？幻覚じゃないのか？）

「本当に紗枝君の娘だよ。。。。その証拠に父上にも少し似ている。。。

。」

（で？お前、囮を引き受けたる気か？）

「じゃなかつたら徹夜して弛緩剤とか睡眠薬とか作るわけないだろう？」

（それもやうだな。。。でもお前、どうやって飲ませる気だ？）

「たぶん紗代であるか調べるために、料理を作らされると思つ、やの中に仕込むんだよ」

（毒味させられて自分で飲んで終わらじやないのか？）

「だから解毒薬も作つてるんだよ！」

（そつちのゴポゴポ言つてゐるほつか？）

「もうだよ、飲んでから出発すれば即効性じやないから2日間は大丈夫！」

（さすが、とでも言おうか？）

「そんな言葉はいらんから少しは手伝え！」

（無理だ！私は犬だぞ！）

「はあ？いまさら何言つてんの？人化すればいいじやん。」

（ちつ、気付きやがったか？？？）

ボンッ

「何か言つたか？」

「いや、別に？」

「おいおい。その姿のとき位言葉遣い直しなよー。」

「いいじやん、別に」

「良くないよ、お前の言葉遣いがつづむだろ？」

「そーいえばお前が捕らえられてるとき私はどうすればいい？」

「あ、話わ^ハりしたな？・・・半端にでも化けていればこ^コじやん。」

「了解^{リョウガク}！」

「よつしやつ・出来たー」

「じやあ寝^ねる」

「今何時だと思^シつてる?」

「大丈夫起^ハしてやるから」

「じやあお言葉^{ハナヒテ}おせで・・・おやすみー」

第一章・燐香の正体（其の一）（後書き）

読んで頂ありがとうございます。

灯籠

第三章・出発の準備（其の一）

（次の日の朝）

「おはよう、炯香、起きねえと布団！」と吹っ飛ばすぞ？
「え？ 舞？ ふあ～おはよう・・・お休みなさい・・・」

「こらー！ 起きろー！ 寝んなー！ おいー！」

バシッ

「ついたー何すんのよー！」

「お前が起きねえからだろー！」

「はつ！ 今何時？ ・・・ あー良かつた10分前か・・・
「さつさと行け！ みんなが待ってるぞー！」

シユンツ

そういうと舞は犬の姿に戻った・・・

「はい、はい」

（・・・・・・・・・・・・）

「じゃ行こうか？」

（ああ。）

そういうと2人は室を後にした・・・
（広間）

「遅かつたねえ炯香」

「はい、少々寝坊してしまって・・・」

「炯香でも寝坊するんだ・・・」

「私だって人間ですよ・・・ 琴李」

「それにしては田の下にくまが出来るぞ・・・？」

（・・・バカ！・・・・・・）

「あら、嫌だわ・・・ 気のせいよ・・・」

「本當だ・・・僕にも見えますよ・・・」

「さては炯香昨日、夜更かししたね？」

「・・・・・・・」

「とにかく、寝る必要だ……寝て来いあと5時間は寝ていて平気だ！」

(おこ、「マイツ一度寝たら起きねーぞ?」)

「…………」(あとで覚えてるよー舞)

「そりですよ朝食を取つたら少し寝なさいな

「ですが・・・」

「これは国王命令です!」

「う、・・・はっはー!・・・

(国王・命令・ね・・・)

「では、食事にしましちゃう・・・」

「そういうと紗代はすつと席に着いた・・・

「まあ皆さんもどうぞ・・・」

その言葉を境にみなが席に着く

「いただきます・・・」

数分後・・・

「」馳走様でした

そう言つと畠香が席を立つた

第二章・出版の準備（其の一）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

そして、更新遅くなってしまってすいません。

灯籠

第三章・出発の準備（其の一）

「炯香……どうして行くつもりですか？」
「え？……」
「室に戻つて寝なさいといつたばかりでしょ」「……」
「え？いやだなあ……室に戻るんですよ……」「嘘を仰いますな……」
「…………」
「おまえの室はいつ門の近くになつたのだ？」
(……お前の負けがあきらめり……)
「はい……すみませんでした……」
「分かつたなら良じのです……早くお休みになつてくれさー」
「……御意……」
そうこうと炯香は渋々室に戻つていった……
「ちゃんと寝てくださいかしら?」
「大丈夫でしょう……一服盛つておいたので……」
「そろそろ効いてくるのでは?」
「あの……何がです?」
「紗代知らないの?睡眠薬ですよ……」
「ああ、つて……え!」
その頃炯香は……
「あーもう、寝ろ寝ろたつて無理だし、心配で……」
(また起こしてやるから……寝とけー)
「いやだね……」
「フランチ……」
「なんか急に体が重くなつてきた……なんでだ?」
(本当は眠いんだよ……きっと)
「うわつ目が開かない……」
(だから寝とけって……)

「いやだ！い・・や・・・だ・・・」

スースー

(あ、寝た・・・つたぐ気付けよな・・・睡眠薬盛りられたんだよ・・・)

・)

数時間後～

「寝てしまつたのか？なにやら妙な夢を見たよつな・・・」

(そりやもつ、ぐつすりと)

「おい！今何時だ？」

(1時30分になるな・・・)

コンコン

第三章・出発の準備（其の一）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
更新が遅れてしまつたことお詫び申し上げます。

灯籠

第三章・作戦実行（其の一）（前書き）

やつと物語が動かすかのように思こます。
今回はグロイ表現はないと思こます。

第二章・作戦実行（其の一）

「ノンノン

「炯香そろそろ起きて下さい。」

「はい、もう少ししたら広間に向かいります・・・」

「はい、ではお待ちしています・・・」

「さて、これ飲んだら、行くか・・・計画通り頼んだぞ・・・」

（了解！）

舞の言葉を聞き終えると、炯香は昨晩調合した薬を一気に飲み干し、室を出て広間に向かつた・・・

「効いたみたいだね？」

その言葉を聞くなり、炯香がブルブルと震えだした

「お前またやつたな、琴李！・・・」

「私だけじやないもん！ね？」

箔と燐霖が深く頷いた

「お前らも仲間かあ――――！」

「落ち着け！炯香」

「ふえ？すいません、紗代」

「おー気合入つてるねー紗代！」

「ふんつ」

「その冷酷さ、それこそ炯香さんです！・・・」

「私はあんなに冷たいか？燐霖」

「まあ、そつくりだな・・・」

ガーン

「炯香も頑張れ・・・。」

「そうですよ・・・。」

「そんなあ傷をえぐらなくともよろしいではないですか・・・。」

「さて、準備はよろしいか？」

「はい！」

「はい！」

「……はい。」

「はい！」

「じゃあ出発するわ・・・・計画通りに・・・・

その言葉を最後に紗代たちは城をあとにした・・・・

（国境）

「そこの南ノ國の王様一行さんよお？』

「ちょっと我が國へ来てもらひつけ！』

「ふんつ外道が・・・・。』

そういうと槻霖は剣の柄に手をかけた・・・・

「安心しなつ連れて行くのはそこの姫さんだけわ！・・・・・

そういうと敵国の兵たちは炯香を捕まえた

「いやー！離してー！やめてー！』

（おい！棒読みだぞ・・・・）

「返してほしかつたら、暁ノ國、暁香稜殿までくるんだな！』

「疾つ

剣を抜いて襲い掛かる

敵はそれを避け、踵を返して、行つてしまつた・・・・

「・・・・・・

「・・・・・・

「・・・・・・

「・・・・・・

「・・・・・・

「・・・・・・

「呆氣なかつたですね？」

「ああ、・・・・さて行くか・・・・。』

そういうと一 行は東の国へ向かつた

第三章・作戦実行（其の一）（後書き）

はじめまして又はお久しぶりです、なかなか更新できなくてすいません
せん月の変わり日はどうしても忙しいですね・・・。
読んで頂きありがとうございます。

これからは早く更新していきたいと思います。
それでは、風邪などひかないよう気をつけ丁寧にお過りしへくださいませ。

灯籠

第四章・囚われの姫（其の一）（前書き）

炯香がついに帝のもとへ連れて行かれます。

第四章・囚われの姫（其の一）

一方その頃畠香はもう暁香稜殿についていて今までに牢に放り込まれるとこりだつた。

「私をどうするつもりですか？」

「さあな・・それは帝にしかわからぬ・・・な。」

「帝からの使いが来たぞ！――！」

その声とともに一人の男が入ってきた・・・

「おお、なんとも雅な・・・」

そういうと畠香の髪に触れた

「触らないでいただきたい！」

「矜持も高いと見える・・・帝が氣に入るわけだな」

畠香が睨みつけた

「そんな怖い顔をしないで下さい。可愛い顔が台無しですよ・・・」

そんな言葉は聞きなれている畠香はお構いなしに睨み続ける

「さて琴と華、茶、笛、仁湖、琵琶が出来るらしいな・・・」

「はい。」

「今から全部やつてもらひ・・・お前が本当の紗代帝だったら易く出来るだろ？」「

「はい。」

「じゃあまずは琴だ・・・ほれ、やつてみい。」

そういうと琴が出てきた

その琴を迷いなく畠香が爪弾く

「次に華」

「次は茶」

「次は笛」

「次は一湖」

「次は琵琶」

すべてが終わった・・・

「どうやら本人らしいな・・・」

実は本人より上手なのがそれを知るは、滅びた西ノ国の者だけだ
るう・・・

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「帝のもとへ連れて行け！」

「御意。」

そう男が言うと炯香は牛車に乗せられた

牛車の中は整備されておらず、がたがたしてとても乗り心地がいい
とはいえないかった。

仕方なく、我慢して牛車に揺られること数十分・・・

第四章・囚われの姫（其の一）（後書き）

読んで頂き光栄です。

それでは、また。

灯籠

第四章・囚われの姫（其の一）（前書き）

ついに紗代ではない」とが帝に呼ばれますが、この帝が結構変わっていて……？

第四章・囚われの姫（其の一）

「帝、南ノ国の帝殿を連れてまいりました……」「入るがよい……。」

その声を聞き終えると炯香は帝の前へ突き出された
「では、私共は下がらせていただきます。」

そういうと家臣達は座をあとにした

「よく来たな南ノ国ノ王よ。」

「何を仰りますか、貴方様がお攫いになられたのでしょうか？」「はは、そうだったな……。」

「…………。」

「表を上げよ。」

「…………。」

「なつ！」

「どうかなさいましたか？」「

「お前、私を覚えていないのか？」「

「はい？私に他国の知り合いなど居りませんが？」（そういえばなんか見覚えがあるような……。）

「痛かったのだぞ！炯香」

「炯香？どなたですか？」（なんで名前を知っているのかしら）

「とぼけるなお前、私の頬をひっぱたいてくれただろ？」「

「…………あ！まさかあの頬弥か？」「

「そうだ、でも確かに南ノ国ノ王は紗代殿じゃなかつたのか？」「そうですよ？」

「じゃあ何故お前がここにいる？」「

「さあ？あなたの家臣が紗代と間違えたのでは？」「

「まあ同じ王族だから品はいいし矜持が高いから無理はないが……。」

「が？」

「逢瀬の約束をした男を殴つてそのまま振り向くもせず帰るような奴とどうやつたら間違えるのかと・・・。」

「ああ、それは私が珍しくおとなしくしていく、紗代が暴れていたからじやないのか?」

「ほう、・・・それに顔が似ているのか?」

「まあ、従妹だしな」

(おいおい、この帝バカだらう、普通偽者だと分つたら怒るだらう)
(私はコイツの初恋の人なんだ)

第四章・囚われの姫（其の一）（後書き）

今回のはギャグっぽくなつてしましました。
更新が遅くなつて本当にすいません。

灯籠

第四章・囚われの姫（其ノ三）

「まあ、いいやお前に会えただけで嬉しげ……。
(やつぱりバカだ……それも手のつけようのない)
「そりゃどーも、でもいいのか?紗代はきっともう東ノ国について
いるんだ……」
「いいのだ……ひわじぶりにお前に会えたしな……。」
「……。」
(もう何も言つま)
「それに、紗代殿をわいせつしたのはお前に似ていたからなのだ。
」
「言つておぐがお前の妃にはならないぞ?」
「なんでだ!」
「いい加減私離れをしてくれよ、先ほど、家臣達が嘆いていたぞ帝
が誰も娶らないと」
「誰も娶る気はない……。」
「妾妃もか?」
「もちろん。」
「お前は私の顔がいいのか?」
「違う!」
「ならば、なぜ紗代を?」
「……顔が似ているからお前の親戚だと思ったのだ……だから。
・・紗代殿をわいせつすればお前が助けにくるかと……お前は強いから。
」
(まあ間違つてはいないが……)
「飽きて怒る気もうせるわ!……」
「でも、こうして私の前にはいるじゃないか?」
「つづく(それを言わるとなんとも言えん……。)
(馬鹿に一本とられたな)

「私はお前意外の女を娶る気はない……だから……どうか私の妃になつてくれ……」

「嫌だ！」

「そんな……」

「泣くな！少しの間……私の仲間が来るまでは側にいてやるから」

「うう……はい」（やつたあ……）

「まさかお前が暁ノ國ノ王だつたとは思わなかつたよ……」

「ああ、あのときは西ノ國に母上と遊びに行つていたときにはぐれたから……。」

「だから泣いていたのか……。」（泣かれると弱いんだよ）

「もう……わるいか？」

「べつに悪かないよ……。」

「……。」

「もし、もしもだお前が紗代をさらわないで、この国にや、南ノ国と暁ノ國が平和で、私が生きていて、暇で暇でつい毎日樂を奏でるようなそんな日がきたらそのときは……。」

炯香の目から涙が頬を伝つてこる……。

「そのときは？」

「お前の妃になつてやつてもいいよ……。」

第四章・囚われの姫（其ノII）（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
更新遅くなつてすいません。

灯籠

第四章囚われの姫（其の四）（前書き）

本当に遅くなってしまってすいません
飽きずに読んでいただけたら光栄です。

第四章囚われの姫（其の四）

「本当か？」

「ああ。」

「やつたー！」

炯香はそんな無邪氣な穎弥を見て笑った

（「コイツが笑うなんて・・・」）

「あ、でも、もしかしたら気が変わるかもしれないからやつぱり毎月会いにいく……」

「はあ・・・・。」

「なるべく早く妃になつて欲しいから・・・。」

「ならば・・・劍で私に勝てたらにするか？」

「2つにしてくれ。」

「いいよ？」

「どつちかひとつが叶つたら妃になつてくれ。」

「・・・うん。」

「よし！がんばるぞー」

そういうと王は室を出て行つた

「おい、そこなものの剣で手合わせ願つ。」

「そんな・・・帝！――！」

「わあー帝が剣の妖にとり憑かれたあー！」

そんな声が聞こえてくる

「ふふふ。」

（炯香？）

「心優しい人でしょ、う？」

（ああ、バカだがな）

「そう、いつまでも、子供の様に心が綺麗なの・・・私には決してないもの・・・」

（王族に生まれながら、珍しい者ではあるな）

「だから怖くも愛しくもあるの、私には勇気が足りないのね・・・」
(人は皆そうさ、楽な関係を壊したがらない。)

「もう今の関係が一番楽、でもいつまでも逃げてちゃダメ・・・ね
(白黒はつきりしてやつた方が良いだろうしつかは、まあその結果
はあのバカの行動しだいだな?)

「そうね、小母さんになる前までには決着をつけなくちゃ
'おーい畠香、私に剣の稽古をしてくれー。'

(ほら、バカ帝がおよびだぞ!)

「ふふふ。」

「おーい、畠香?」

「いいよー。」

(・・・でもこうこうやつに限つて押しかけ女房みたいな奴がいる
んじやないのか?)

そんなことを考えていると・・・

第四章囚われの姫（其の四）（後書き）

はじめましての方も、お久しぶりですの方も
読んでくださいありがとうございます。
続きを読もう是非読んでください。

灯籠

第五章・押しかけ女房（其の一）

「どこからか「帝 何処にいらっしゃるの?」とこう声が響いた
(言わんこつちやない……)

「帝、炯香様……あの、お客人がいらっしゃっています……」

「誰だ?」

「近衛花音様です……」

「げつ……」

「は? どんな方ですか? 花音様とは……」

「この国一の美女で帝が3年前転んだ花音様にお声を掛けたといふ、
一日ぼれしたらしく……それはもう毎日宮中で働いているお父上
様に会いに来るついでとか言つて帝を追い掛け回している……俗
に言つ『押しかけ女房』ですね……」

「ほう……それは、それは……あれ? 帝?」

「早速お逃げになられたようで……」

「あの、お茶をもらえるかしら?」

「はい? ただいま

侍女がお茶をとりに行くと炯香は王室に戻った……

「で、どうしたの……舞?」

(それが押しかけ女房が……来た……と)

「ああ、花音様のことでしょう?」

(花音といつのか?)

「そちらじいよ……舞そろそろ姿を現しなさいよ……私が一人で喋
つてる、馬鹿みたいじゃない……!」

(へーい)

そういうと舞が人化した

「これでいいのか?」

「うん……」

「で、その女は花音といつのか……。」

「その女つてこの国一の美女のことを……。」

「だつて炯香より綺麗じやなかつたもん……。」

「私と比べては可哀想よ？私の母上は人間じやないんだから……。」

「月翳りの兎手の子……か？」

「そうそう……。」

「あの、お茶お持ち……はつ！誰ですかその女人は……？」

「ああ、これ？仲良くなつた貴族の方……。」

（これつて、おいおい、苦しいいいわけだなあ……。）

「そうでしたか……すいません」

「いいえ……お気になさらず……。（ヤバイいつかばれる……。）

「で、帝は？」

「ああ、そこで花音様と追いかけっこをしているよ……。」

第五章・押しかけ女房（其の一）

「あ、捕まつた。」

「ほほほ、花音様綺麗なのにあのような方で・・・でも炯香様は眉目秀麗でおしとやかなのですね・・・帝がお気に入りになるわけが分かりましたわ、そちらの方もお美しくていらっしゃる・・・」

「やんなじいじやせこませるわ、貴女様も十分お美しいではないです
か……。」

卷之二

「呼んでいるよ？ 無香様・・・？」

お待ちにはなつておられ！」

「では、私が。・。・。」

「いいの？ほんとに行かなくて・・・？」

花音林の氣が漲む。やせぬ。じ、う。

やうだな。では和が行く事はないだよ。

「お前が行つてキレると困るし、な・・・」

葬は黙殺を持つてその場をやり過ごした・・・

おれ神田のね出ましのようだな……。

「やあ！久しぶりだね。炳香に葬焚・・・相変わらず仲が良いようで安心したよ。」

「何しに来たんです？神王陛下・・・。」

「蒐冀だよ・・・炯香・・・ここではそう言つただろう」・・・まあ人界での名だがね・・・。」

「では蒐冀さん何しにきたんですか？」

「さん、は要らないよ・・・？」

「いい加減いたぶるのはやめてあげてくれないか・・・秋姫姫・・・。」

「いたぶるなんて・・・人聞きが悪いね・・・それに人界では蒐冀だよ・・・葬焚？」

「・・・蒐冀様・・・。」

第五章・押しかけ女房（其の二）

「だから、様は要らないよ・・・全く似たもの同士の主従だね？黒華」

「そうだな、蒐冀・・・俗に言つ犬は飼い主に似る・・・といったところか？」

「そうだね。今田はちょっとこの国に逃げ出した、狂魔を倒しに来たところだよ？」

「はあ、それで？」

「帰ろうとしたら炯香を見かけて、なにやら面白そうだから様子を見に来たのだよ。」

「そんな理由で…普通滅多に姿を現さない神がそれもその神たちを束ねている神王が」

そんなふうに驚いている炯香をよそ田に自ら茶を注いで飲み始めている

「はあ・・・君のその真面目さはいつ見ても飽きないよ・・・」「何を！」

蒐冀は茶を飲み終えると体重を感じさせないほどすっと立ち上がった
「さて、私はそろそろ失礼しよう・・・」「さつさと帰つてください！」

「冷たいなあ・・・じゃあ炯香、また様子を見に来るよ・・・。
そういうとひらひらと手を振りながら蒐冀は天へ帰つていった
「一度と来るな！――！」

「何しに来たんだろう。あの神はいつもそうだ・・・何もないのに私のそばに来ては、花見だの、人界の茶を飲みに來ただの、意味不明なことを言いつつ天からわざわざくるなんて、仮にも神が！神王が！！！拳句の果てには面白そつだから様子を見に來ただと？いい加減にしろ」

「おいお前、不本意ながらも命の恩人だらうが・・・」

「恩人じやない！恩神だ！！！あんな奴が人であつてたまるか！！！」

「怒るところはそこなんだ・・・。」

第五章・押しかけ女房（回想）

「い」で少し、炯香とあの神王の昔話をしよう。

「西の国へ

その国は天より抜け出して来た狂魔（狂った悪魔のこと）が沢山いたそれを狩るのが黒蝶（月齧りの兇手）そう炯香の母、薇莠の役目だつた

炯香の母は縁盟界に属する半神半魔だったがその強大すぎる力と月をも齧らせる美貌のせいで人界のものからは求婚され、それが嫌だつたので秋姫の母（神王）に相談したら、人界の帝を紹介してきて、「一度やってみたかったのだ、仲人を、などと言いながらかつてに婚約を結んだ」それでも必死に逃げた薇莠だが、だんだん心がその男に引かれていき最後はあきらめるように仕方ないといって婚約を受け入れ翌年に結婚。その後3年目に炯香を産み、育てた。しかし薇莠は炯香が5歳のときに何者かによつて殺されてしまい炯香の父もそのとき同時に殺され、炯香は誰にも頼らず妹と一緒に宮廷という地獄で生き延びていた。しかし炯香が王になつてから4年の年月が過ぎたときその悪夢は起こつた。なんと炯香たち王族の次に位が高い家臣が、謀反を仕掛けてきたのである。

炯香は3歳になつた頃母から剣の稽古を受けていたし月齧りの兇手（黒蝶）の名を次ぐために人の殺し方も学んでいた為に一命は取り留めたが妹の香華はまだ母が死んだ頃一歳で幼かつた為、学んでおらず助からなかつた・・・。

そして息も絶え絶えになりながら炯香が

「母上、香華やつと、やつと貴方たちのお側に・・・私も・・・行きます」と言つていたところに、人影が現れ「師匠の子はコイツか？」と横にいる臣下に聞いている。

「はい、そうです。」

「そうか・・・そこな童子・・・お前生きたいか？」

「生きたい・・・です。」

生きたいとなぜか思ったそしてこの国を、この世界を変えるのだ、と
その数秒後・・・ついに、炯香は気を失ってしまった。

「そうかならば生かしてやるつゝ、他ならぬ師匠の頼みだ・・・この
者にその気がなかつたら問答無用で見捨てよつかとも思ったが、そ
うではないらしい」

そんな声が聞こえた気がした・・・

第五章・押しかけ女房（回想）

「う、ん」

炯香が目を覚ますと全く知らない所にいた・・・
「起きたか？」

「は、はい・・・申し遅れました、私は炯香と、申します・・・王族の出なので姓はありません」

「知っているよ・・・君の姓は垂氷。私は、秋姫だよ・・・よみじく炯香。」

「秋姫様、貴女はいつたいどのよつなお方ですか？」

「私？私はね・・・」

「神王陛下！・・・」

「どうしたんだい？騒がしいね、怪我人の前だよ・・・？」

「申し訳ございません。」

「で、なんだい？何か用があつたのだろう？」

「あ、はい、大変なんです」

「ほう、」

「雨龍様が・・・いらっしゃったのです」

「は？なんだつて？最悪だ・・・」

「何が最悪なのかな？我が姫よ・・・おつと今は我が妻だったつけ？」

「うわつ、なんでもない、なんでもないからそれ以上寄るな！・・・」

「ひどいねえ、いいじゃないか・・・。」

「良くない！今、お前の魔力にあてられたら、いくら黒蝶の跡継ぎでも死ぬ！」

「あのー？」

「なんだ？」

「神王とか魔力とか何を言つてるのか良くわからないのですが・・・

「こ人界ですよね」

「違うよ、えーと、炯香殿、ここは秋姫の統べる天界だよ・・・な、
秋姫」

秋姫が雨龍が炯香に伸ばした手を問答無用に叩いた
「だから・・・炯香に寄るな！－！」

「大丈夫、今の私は神力を強めて、少々、いや結構魔力は門の前に
おいて来たから・・・」

「その・・・私死んだんじやなかつたのですか？」

「私が助けた、それが師匠の望みだつたから」

「師匠とは？」

「あなたの母上のことですよ炯香殿」

「まさか、まさか母上は生きているのですか？」

「いや、生きてはいない、ただその力が強すぎた為に靈として残つ
たようだ・・・無論今は寝ている」

「元気になつたらあわせてやろう・・・だから今は寝なさい・・・
「そうだよ、炯香殿。秋姫は怒ると恐いから怒られる前に寝ておい
たほうが身の為だよ」

「余計なことを！－！」

「だつて本当のことだもんね？遠雷」「遠雷」

秋姫の横に控えていた遠雷がうんうんと頷く
「でも、雨龍のほうが恐いよね？遠雷？」

負けじと秋姫も言い返した

遠雷は黙つたままそれにもうんうんと頷いた

「まあ、とにかく寝なさい私は少々秋姫に相談があるから借りてくれ
よ。」そういうと雨龍は秋姫を連れて部屋を出て行つてしまつた。

第五章・押しかけ女房（回想）

「天界とか、縁盟界つてなんだろ・・・なんか不思議な人たちだな・・・」

（天界は神王陛下の管理している人界で言う『国』のようなものですよ）

「だ、誰！誰かいるの？」

いきなり若い女が姿を現した

「驚かせてしまってすいません・・・私は葬焚と申します」

「葬焚さん？」

「はい、本来この姿をしていますが人界で犬の姿をとりますのでどうか、驚かないでください・・・」

「で、葬焚さん。どうして私のところに来たのですか？」

「葬でいいですよ。神王陛下の命令で本日より貴方の配下に下りました・・・なにとぞ、宜しくお願ひします。」

「葬・・・私が貴方の主？」

「はい。配下になつたからには、貴方様の命令しか訊きませんので、ご安心ください。」

「相手が・・・たとえ秋姫様でも・・・ですか？」

「はい。」

「では、私のことは炯香と呼んでください・・・それと一番近くにいる存在になるのですから敬語もやめてください」・・・

「・・・ですが・・・」

「命令です。」

「うん・・・わかつた。」

「葬。」

「はい？」

「あの縁盟界つてなんですか？」

「縁盟界とは正式名称・・・『縁』があつたので魔界と天界の人々が

同盟を結んだ界』といつて魔界の民と天界の民が文字通り一緒に暮らしている界で今は神王秋姫様の妹様である氷華様が2代目として治めている界です

「界とは？」

「界は『国』という意味を持ちます。」

「そうですか。ありがとうございました。」

「はい。後々秋姫様から」説明があると思つので今はゆっくり寝てください・・・」「はい。」「はい。」

第五章・押しかけ女房（回想）

その頃秋姫たちは・・・

「で何の用だ？雨龍！……」

「相変わらず冷たいね・・・？」

「冷酷で有名なお前にだけは言われたくないな！」

「あの娘の妹御が冥界に間違つてしまつて小春殿に『どうせ毎日子供の顔を見に行つてるんだからついでにその事も伝えてこ』と言われたから伝えにきた」

「さすが小春姉上・・・怖いなあ」

「私のほうが上位にいるのにそんな気がしないよ・・・」

コンコン 窓をフクロウがつついで少しあいているところから入ってきた

「フクロウ？めつたに来ないのに・・・」

「文を開けてみれば？」

秋姫が文を開けた

『誰が怖いって？ああ、それとそこにいる 魔王陛下に伝えてくれ少し伝えるくらいで何時間かかっているんだ？お前は道に迷ったガキか？この私に仕事全て押し付けて・・・』

斯夏殿が黒南風家当主のことで用があるらしいから待つているぞ！――』

秋ちゃん我が妻のところで反発しなくなつたんだね・・・ふふふ返事書かないどうなるかわかっているわよね？

椿 小春

しばし沈黙がありた（二人とも責めめている）

「じゃあ私は失礼するよ・・・怖い手紙も来たことだし

「そのほうが・・・いいよ・・・うん。」

その返答を聞くと雨龍は急いで帰つていった。

数分うつむいて秋姫は机に向かい文をしたためフクロウで飛ばした。

（炯香の室）

コンコンという音がしたかと思つと、神王（秋姫）が入ってきた
「具合はもう宜しいですか？」

「はい。ありがとうございました。」

「これからのことをお伝えしますね。」

「・・・はい。」

「明日より炯香には、我が妹である縁明界の当主のもとで人界とは
異なつた武術等を学んでいただくと同時にこの界に慣れていただき、
後々また人界に下つていただきます。」

「・・・はい。」

「この界は平和ですので、あまり心配はないと思いますが、葬焚を
つけさせていただきました・・・もう、お会いになりましたね？」

「・・・はい。」

「貴方の妹ですが私の2番目の姉が保護したということなので、人
界に下りる事はできませんが・・・ご安心ください。」
「生きているんですね？」

第五章・押しかけ女房（回想）

「いえ、もう人ではございません」
「え？」

「この界の民といつゝことです。」「

「会つ」とはかねいますか？」

「ええ、妹殿も貴方にお会いしたいといつていふと、申しております故。」

炯香と秋姫の出会いは唐突だった。

炯香の秋姫に対する印象は変な人だけどす「ごい人」というものだつた。それと反対に今、横にいる舞焚に対する印象は優しくていい人だつた。

「炯香　け・い・かあ　？」

「・・・」

「おーい炯香？」

「なつなに？」

「いや。やつと花音殿が帰つたから茶でも淹れてくれないかと・・・」

「ああ、お茶？」 そうこうと横においてあつた茶筒を手にとると
寧に淹れた。

「に、苦い！なんという茶だ？」

「えーと」 そろいのながら茶筒を見た

（お、おいそれ！）

「あ、甜済茶あ？」 下に落ちていた紙を拾い上げると目を通す

「これは、天界の茶だ、良かつたら飲んでくれいつも人界の茶を飲ませてもらつてる礼だ。（人にはちょっと苦いかも知れぬ）」

「あんのつ神　！！！」

「神？神がどうした？」

「いえ、なんでもない、気にしないでお湯加減を間違えちゃつた

みたい淹れなおすね

「いや、いい慣れてくるとなかなかうまい。」

「ほんと? それは良かつたわ。」

「・・・・・」

「帝大変です南ノ國のもの達が姫様を助けに参りました」

「よい。通せ、ただし敵としてではなく、私の客人として。」

「ですが帝・・・」

「私に同じことを二度も言わせる気が?」

「いえ。申し訳ありません・・・ただいまお通しいたします。」

第六章・迎え

数分後

燐霖たちが王室に入ってきた。

「失礼いたします。」

「お初にお目にかかります、紗代と申します。」

「どうも。」

「人の國のものをさらつておいて全く呑氣な帝だな。」

「炯香を返しなさ」よ……帝だからなんだから知らないけどこのへんくでなし！」

「もちろんお返しする。久しぶりに昔の話が出来て楽しかったよ。炯香」

「私も楽しかったよ。穎弥。」

「あれえ？お二人知り合いなんですか？」

「ああ昔なじみでな。」

「ほんとにそれだけ？」

「琴季。人には他人に知られたくないことの一つか二つあるものだよ。」

「否定はなさらないのですね。炯香」

「紗代まで……そういうこれからは南ノ国には手を出さないでいただけるらしいぞ？」

「もちろん私はお前に会つたために情報をきりつけて手を出し」

「ああーとにかく説得しといたから。」

「さすが、炯香。」

「あ、でもお前の出かた次第だと「う」とを忘れないよ！」。「たゞよ！」

「はいはい。」

「私はまじめにだな……」

「くつくつく。痴話喧嘩はそのくらいにしておけ。」

「な、痴話喧嘩だと？ふざけるな燐霖！……！」

「ふざけてなどこないよ?ね?琴季?」

「ううん!」

「僕もそう思います」

「誰が見ても痴話喧嘩に見えるかと」

「言つようになつたなあ。紗代?」

「そりですか?」

「さて、私たちは帰らせてもらひおひ。」

「そうですね、炯香

「え、もう?」

「長居は出来ぬ・・・」

「で、でも・・・」

「あーわかつたよ、また来るからそれで勘弁して?ね?」

「むー・・・わかつた。」

(子供が?)

「さよならー」

「また来るんだよな?」

「ぐどい。」

そのことばを最後に炯香達は暁ノ国を後にした炯香たちが南楼城についたのはもう口も傾いた頃だった・・・

南楼城

「やつと着いた・・・炯香の鬼！」

「は？」

「なんでーじうして一休みもしないでずっと馬なのよーーーお陰でお尻が痛いわ！」

「それは琴李の体力がなさすぎるから・・・」

「はいはいどーせ私は槍とか手裏剣とかしか使えませんよーだ！」

「無論いつも馬に乗つていなかつただな」

「まあまあ一人とももひ喧嘩はおやめなさいな」

「・・・ふんっ」

「・・・」

「私は用があるので部屋に戻らせてもらひつよ・・・」

「はい。」

「あ、炯香さん今度琴を教えてもらひますか？」

「ああ、暇なときにな。」

そう言つて手をひらひらと振りながら炯香は部屋に戻つていった

ガチャ

「やあ」

バタン

ガチャバタンガチャリ

「なんだい？慌てて」

「何をしてるんですか貴方は！ー！」

「君の部屋でお茶をいただいていたよ、おそかつたね。」

「少しほきをつけて下さい！入ってきたのが私だつたから良かつた

ものの、もしも他人だつたらどうするつもりですか！ー！」

「もちろん容赦なく記憶を消させてもらつよ。かわいそうだけど・・

・ふふふ。」

「そんな簡単に・・・」
「だつて簡単だもん・・・そりそり天界の茶はどうだつた?」
「苦いといつていた。」
「ほう人間でも飲めたか・・・」
「まあ、私にはちょうど良かつたが。」
「ああ、それは君が半神半人だから・・・」
「それで今度はなんのようです? 蔑冀」
「仕事だよ? いつもどおりやつてくれれば十分だらう」
「今度のは、狂つて何日目ですか?」
「一日といつてこなかな・・・?」

第七章・仕事依頼（後書き）

もう冬ですね、季節の変わり田は風邪を引きやすいものです、私は
案の定引きました・・・。

皆様もどうかお気をつけください。

更新遅くなつてすいません。

よろしければ感想など、いただけますと非常に有り難く存じます。

灯籠

もつひとつ用件

「用件はそれだけですか？」

「いや、そろそろ今年も酒宴を開くから招待状をね」

「ああ、これですか？」

「うん、名前を書くのを忘れてしまって……」

「はあ。」

「あとくるときにお土産でキセルを買ってきてくれないか？」

「ああ、いいですよ。では斯廈さんと氷香さんと雨龍さんと桔梗さんと小春さんには何を買っていったらいいですか？」

「雨龍以外はみんな着物でいいと思う。雨龍には扇だねそれも漆黒の・・・・・うん。それでいいとおもうよ。」

「わかった。」

「じゃあ私はこれで、また4日後ね？」

「はい。」

その言葉を聞き、頷くと天へ帰つていった

「おなかすいた。」

(私も同感だ)

「作るのめんぢくせこ。」

(神法で出せばいいじゃんー)

「あ、そっか！じゃあ早速

すうつ

「天に属せし味の神よ我が前に夕食を出したまえ。」

目の前に食べ物が出てきた

「じついう術は初めてだから美味しいか分からないけど・・・どうぞ。」

(わあ、おいしそうー)

舞が人化する

「いただきます」

「おいしい！」

「そうね」

二人はあつという間に食べてしまった

「じゃあ私は寝るわ」

「私も。」

（数時間後）

「助けてー 誰かー たすけてください・・・」

「聞こえた、舞？」

「ええ、確かに。」

「行きましょう・・・？」

「はい。」

タツタツタツ

「どうなされました？」

「人を食らつものが！・・・出たのよー3人ほど連れて行かれたわ・

・・・

まつりの用件（後書き）

更新遅くなってしまってすみませんでした。

灯籠

もつ一つの用件2

「そうそう、炯香殿。」

「はい？」

「穎弥、いるだろ？」

「?はい。」

「あいつ実は私の甥だから・・・」

「え、」

「仲良くしてやってくれ。」

「?はい。」

「それでは後日・・・」

「はい。」

その言葉を聞いた後、雨龍とは思えない笑顔で帰つていった

（次の日）

「おはよ！」

「おはよう紗代。」

「昨夜、出かけたでしょ？」

「ああ、うん。」

「昨日、西の国で有名だった月翳りの児手の噂が立つっていたのですが、まさか・・・」

「月翳りの児手、ああ、あの月も翳らせるところあの、確かにその人はもうお亡くなりになられたはずですよ？」

「そうなのですか。」

「ええ、それと私今日から数日間、私用で出かけますので留守をよろしく。」

「はい。」

「では行つてきます。」

「行つてらつしゃい炯香。」

「おはよう紗代！』

「おはよつ琴李ー。」

「朝からうるさいーー一人とも。」

「あ、燐霖さん。」

「おはよつ。」

「おはよつ!」
「おはよつ!」

「おはよつ燐霖!」

「ああ、おはよつ琴李。」

「おはよつ!」
「おはよつ!」

「おはよつ!」
「おはよつ!」

「おはよつ!」
「おはよつ!」

「おはよつ!」
「おはよつ!」

「おはよつ。」

「嘘でしょ?」

「私が嘘をつく理由がありますか?」

「・・・すみません。」

「・・・いいえ。」

「でも、炯香はどこへ行つたのですか?」

「私には、言わなかつたですよ?」

「怪しいですね・・・。」

「私もそう思います。」

「そりが?俺は思わんが・・・。」

「怪しいですよ。」

「・・・。」

めいひの用件2（後書き）

お久しう「ついで」こまます。
更新遅くなりまして読んでいただいている、方々には
誠に申し訳なく思います。

灯籠

縁盟界の裏（前書き）

のほほんと読んでいただけると幸いです。

「その頃の縁盟界」
「お久しぶりです。炯香」
「こちらこそ、現縁盟界王。」
「今日は、神王陛下はいらっしゃりますか?」
「姉上?うん。来てるよ、雨龍様も一緒だけど・・・」
「母上!」
「なーに?」
「穎弥兄ちゃんは今日来ないの?」
「来るよ。」
「母上この人だあれ?」
「黒蝶さんよ」
「はじめまして。2代目黒蝶の炯香と申します。以後お見知りおきを。」
「炯香!」こつは見ての通り私の子だ。あとで遊んであげてくれ。」
「はい。」
「母上このお姉ちゃんも大会出るの?」
「大会?なんですかそれは・・・?」
「それは私から説明するよ・・・。」
「姉様!」
「秋姫!」
「今日酒宴の前に集まつた者たちの力比べも兼ねて剣術の大会をしようと思つてね」
「私も参加可能ですか?」
「いいや炯香は手加減できないからダメだよ」
「ならば秋姫あなたがお相手してください」
「いいけど氷のほうが剣術は強いよ?」
「では私が秋姫に勝てたら勝負してください氷華」

「いいよ。」

「では後ほど・・・」

「おやちよつと遅かつたね穎弥殿」

「はい?」

「なんでもないですよ」

「申連れましたお久方ぶりです氷華殿。始めて秋姫殿

「はじめまして。お前が雨龍の甥か?」

「ええ、久しぶり

「はい。伯母上様伯父上は?」

「雨龍かそれとも榊?」

「雨龍伯父上のほうです。」

「巫莠と一緒に来るよ?」

「界王陛下、神王陛下、そろそろ大会が始まります故、会場へお集

まりください。」

「ああ」

「はい。」

「これから何があるのですか?」

「ああ。剣術の大会だよ。」

「面白そうですね・・・」

「良かつたら見ていくか?」

「よろしいのですか?」

「ああ。もちろん」

「席はあるよね?氷

「はい。姉上」

縁盟界の宴（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。
更新が滞つてしまつてすいませんでした。
今後とも、宜しくお願ひいたします。

灯籠

（中庭）

「これより、大会を始めたいと思つ」

「勝つたものには、我らが界主であり、界一の剣の名手永華様とお手合わせ出来ます。」

「だとよ、氷。負けたら大変だな？」

「姉上、私は私を負かしたもののは末期のほうが怖いです」

「ああ、雨龍の弟ね・・・確かに。」

「私が、なにか？」

「父上！」

「樟久しぶりだな」

「これはこれは儀姉上お久しぶりです」

「穎弥元氣か？」

「はい伯父上」

「なぜここへ来た？ 樟」

「だから子供に剣術の大会は見せるのは田に毒だから、迎えに来たんだよ。」

「いいじやないたまには、ねえ」

「僕母上の手・・・」

「ふごつ

「手なんだつて？」

「なんでもないのよ。あなた」

「ふーん」

「さあ帰ろつ、緋龍」

「ぶー・・・はい。」

「じゃあ、また後で。」

「あーあ私も出たかつたなあ。」

（仕方ないだろ秋姫がダメだといったのだから）

「ちえつつかんないの」

「おやおや、これはこれは炯香」

「あ。雨龍殿」

「父上知り合い? ふりん?」

「こりこり、何処で覚えたんだいそんな言葉」

「母上が言つてたよ?」

「秋姫か。」

「あ。父上母上を叱らないでね?」

「はいはい。わかつたよ」

「申し遅れました、私は2代目黒蝶の炯香と申します。以後お見知りおきを。」

炯香がさつと何かを取り出す

「お土産です。どうぞ」

「ありがとう。秋姫が言つたんだね? 全く嫌がりせはぬきないね。」

「?」

「ああ、気にしなくていいよ」

「はい。」

「では、後ほど・・・」

「バイバイ黒蝶のお姉ちゃん」

「ええ、ばいばい」

(さて次は椿様に)

「あら、炯ちゃんじきびよつ」

「椿様!」

「なあに?」

「これお土産です」

「真紅の衣・・・ありがと」

「気に入つていただけましたか?」

「ええ。とても」

「小春」

「なんですか桔梗姉様」

「え」

「おお炯香殿。先日はすまなかつたね」
「いいえとんでも」「やれこません。・・・それとお土産です」

「漆黒の衣か・・・気に入った、ありがとうございます」「喜んでいただけて光栄です。」

「では、後ほどお礼を買いに行こうか小春」

「はい、姉上」

「すいません斯夏様は？」

「ああ、まだ来ていないよ~あの子はいつも酒宴ギリギリに来るから・・・」
「やつですか、ありがとう」「やれこました。」

お土産（後書き）

お久しぶりです。

今回も読んで頂きありがとうございました。

灯籠

兄弟の黒い会話

（出店）
「あ。兄上！」
「おお櫻！久しぶりだな。」
「お元気でしたか？」
「なに？あれが早く死ねとでも？」
「いいえ。とんでもない」
「ちょっと緋龍、巫葵。母上達のところに行つてなさい。」
「はーい。行こつ？緋龍」
二人の姿が見えなくなつたのを見届けると雨龍が口を開いた
「で、何か話があるんだろ？」
「はい。兄上」
「ん？」
「もし、もしですよ・・・氷華を剣術大会で傷つけたものを半殺し
にしてもいいですか？」
「何でそんなこと俺に聞くんだ？」
「やー兄上ならやつたことがあるかな。と」
「ない。」
「きつぱりですか」
「だが、秋姫が負けたときは秋姫に稽古をつけてやつた・・・。」
「そうですか（怖い）」
「お前も怖いこと言ひつなあ」
「いいえ。兄上には言われたくないです。」
「あはは」
「お前も稽古をつけるか、仕置きをするかにしておけ」
「はい。」（遠い目）
「さて。そろそろ酒宴だな私たちも行くか？」
「・・・・・・」

榊は有無を言わせない田に負けた

「・・・はい。」

「秋姫の室へ

「姉上。どうじよつ・・・・・榊におひられる・・・・・」

「あはは。まさか頬に傷つけるなんて思わなかつたよ。でも勝つたのにねえ?」愁傷様

「ひどい。冷酷!絶対しつ返しがくるんだからあー。」

「人のこと心配する前に自分のこと心配しな、なんか嫌な予感がするよ。」

「そんなん・・・・・!」

「私の勘は外れたことがないからね。」

「うつうつ・・・・・

「それに私じゃ無理だよ雨龍に助けてもらひつか榊に泣きつかないと・・・。」

「だめなの!儀兄上は助けてくれるかもしないけど、榊はいつも泣いても気がおさまるまで許してくれないの!」

「ちょっとだけ・・・・・言つてあげるから泣かないの!・・・

「は・・・・い。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531c/>

黒蝶の後継

2010年10月13日03時56分発行